

# 白への恐怖、黒へのあこがれ

——ウィンキン・デ・ウォードの標題紙(4)——

Not white, but black ;  
title-pages made by Wynkyn de Worde(4)

高野 彰

Akira TAKANO

## Abstract

Wynkyn de Worde endeavors to 'fill up' the title-page. 'To fill up page' principle is not applied to only title-page, but all pages in quires of the book. If there is a blank page (or pages) at the head or the end of the book, he fills it up with woodcut, including printer's mark. If there is a scrap of space on the last text page of the book, he fills it up with colophon (and printer's mark).

'To fill up page' principle which he lays down enables us to explain why he used many kinds of woodcuts at the head or the end of the book. It is the same action as we now play on book-making.

## 32. 巻頭付近の白ページ(X形、Y形)

同じ余白でも、巻頭付近ではどんな現れ方をしているのであろうか。その様子は表28-1で「前」と表示した項に示した通りである。この表で使用しているX1、Y1と言った略号を説明したのが表32-1であり、これをさらに要約すると表32-2となる。

表32-2は表中の見出しからわかるように、最初の折丁の最初の3ページの様子を示している。第1ページ、第2ページそして第3ページである。

表32-2で「X」形とは最初の折丁(巻頭)の最初のページが本文ページになる形である。この表示形は1種類(X1)(図32-1)しかない。巻末では最終活字ページの活字が何行目で終わるか一定しないため、余白を埋めるために複数の表示形ができる。巻頭では本文がページの上部から始まり、中間とか下部から始まることはない。そのため冒頭が本文で始まっていれば、常に「ページいっぱい表示」となる。

表 32-1：「表 28-1」の「前」の項の整理表

		a1 <sup>a</sup>	a1 <sup>b</sup>	a2 <sup>a</sup>
X	1	本文		
Y	1	標題紙	本文	
	2	標題紙 (Incipit title)	本文	
Z	1	標題紙	木版	本文
	2	標題紙	白頁	本文
	3	標題紙 (Incipit title)	木版	本文
	4	標題紙 (Incipit title)	白頁	本文
	5	木版	標題紙	本文
	6	木版	木版	Paragraph title・本文
	7	木版	白頁	Paragraph title・本文
	8	白頁	白頁	本文
	9	白頁	木版	本文
	10	木版	目次	Paragraph title・本文

a1<sup>a</sup>：第1ページ、a1<sup>b</sup>：第2ページ、a2<sup>a</sup>：第3ページ

表 32-2：巻頭付近の白ページと本文ページの位置

	a1 <sup>a</sup> ：第1ページ	a1 <sup>b</sup> ：第2ページ	a2 <sup>a</sup> ：第3ページ
X形	本文ページ		
Y形	白ページ	本文ページ	
Z形	白ページ	白ページ	本文ページ

なお、標題紙が「ページいっぱいの表示」を目指していたことは前述した通りであるから、第 32、33 項では標題紙が実際に「ページいっぱいの表示」になっていなくても、標題紙であれば「ページいっぱいの表示」をしているとみなしておく。

「Y」形は最初の折丁の第 1 ページが白ページで、本文は第 2 ページから始まるので、「白ページ＋本文ページ」となる。この形は 2 種類 (Y1、Y2) あり、これらに対応するのが図 32-2、図 32-3 である。Y1 と Y2 では白ページがいずれも標題紙 (図 32-2-1 と図 32-3-1) として使われている。従って Y1 と Y2、はいずれも「ページいっぱいの表示」をしていることになる。なお木版の表示機能に関しては第 33 項でも取り上げている。

### 33. 巻頭付近の白ページ (Z 形)

そして「Z」形は本文が最初の折丁の第 3 ページから始まり、その前の 2 ページは白なので、「白ページ＋白ページ＋本文」形となる。この形は 10 種類 (Z1、Z2、Z3、Z4、Z5、Z6、Z7、Z8、Z9、

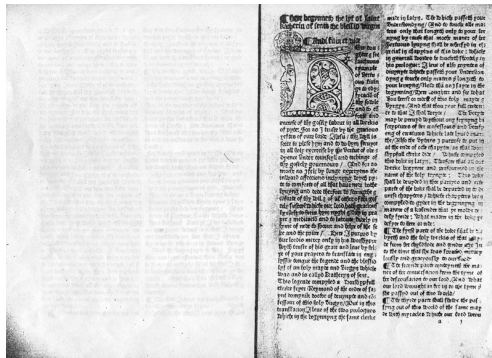


図 32-1 (24766 1492 年) (X1)



図 32-2-1 (stc.1917, 1496 年) (Y1)

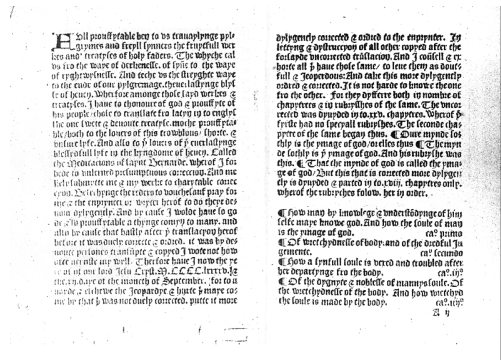


図 32-2-2 (stc.1917, 1496 年) (Y1)



図 32-3-1 (stc.17011, 1497 年) (Y2)

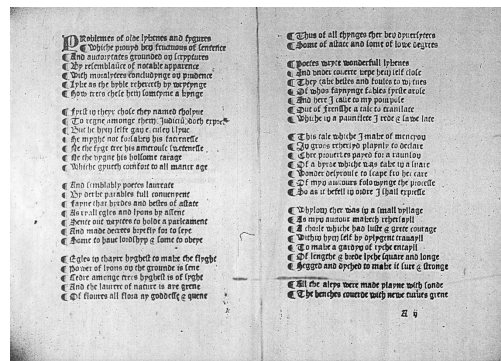


図 32-3-2 (stc.17011, 1497 年) (Y2)

Z10) あるが、さらに細分すると白ページを全部埋めた4種類(Z1、Z3、Z5、Z6)と白ページや大きな余白が残っている6種類(Z2、Z4、Z7、Z8、Z9、Z10)に分けられる。

最初の4種類では2白ページが標題紙か木版で埋められているので、「ページいっぱいの表示」となる。これらに対応するのが図33-1(Z1)、図33-3(Z3)、図33-5(Z5)、図33-6(Z6)である。



図33-1-1 (stc.5759, 1496年)(Z1)



図33-1-2 (stc.5759, 1496年)(Z1)



図33-2-1 (stc.11613, 1502年)(Z2)

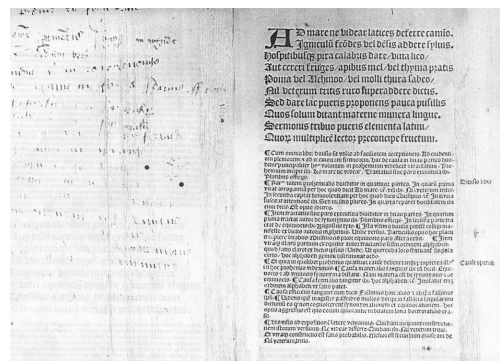


図33-2-2 (stc.11613, 1502年)(Z2)



図33-3-1 (stc.787, 1497年)(Z3)



図33-3-2 (stc.787, 1497年)(Z3)





図 33-4-1 (stc.12945, 1504 年) (Z4)

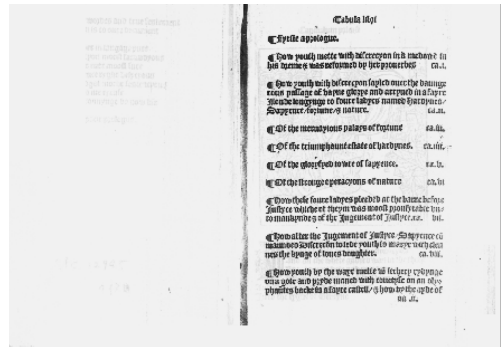


図 33-4-2 (stc.12945, 1504 年) (Z4)



図 33-5-1 (stc.3309, 1496 年) (Z5)

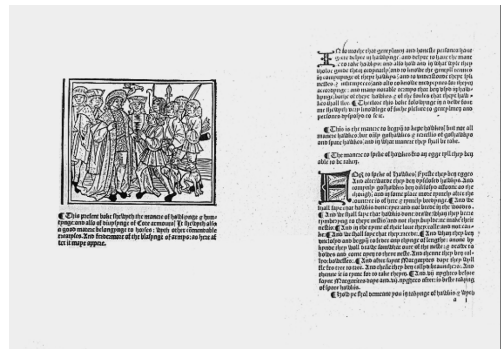


図 33-5-2 (stc.3309, 1496 年) (Z5)



図 33-6-1 (stc.17022, 1500 年) (Z6)

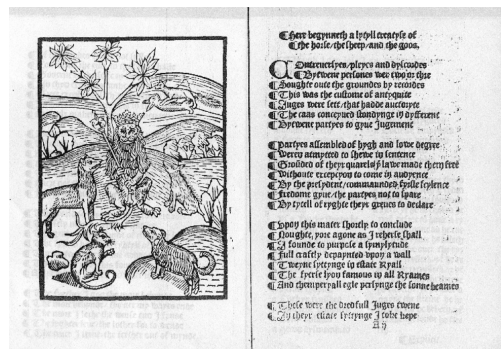


図 33-6-2 (stc.17022, 1500 年) (Z6)



図 33-7-1 (stc.17020, 1500年) (Z7)

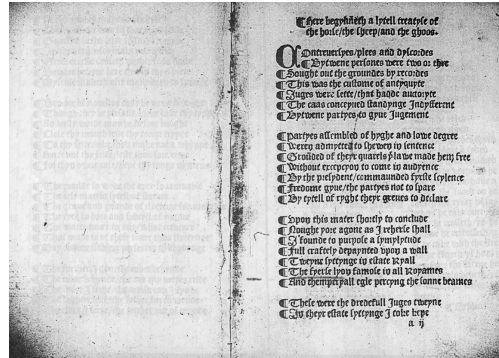


図 33-7-2 (stc.17022, 1500年) (Z6)

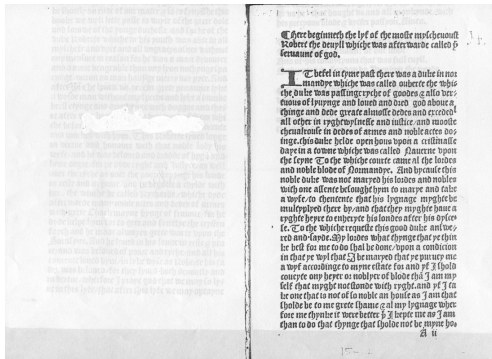


図 33-8 (stc.21070, 1500年) (Z8)

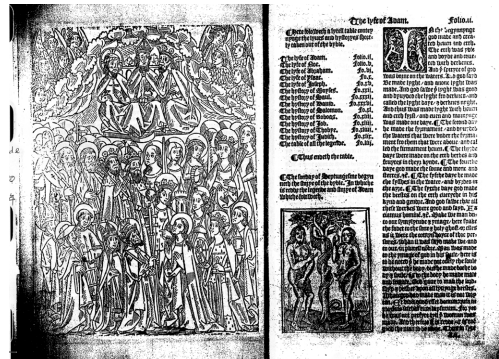


図 33-9 (stc.24880, 1527年) (Z9)

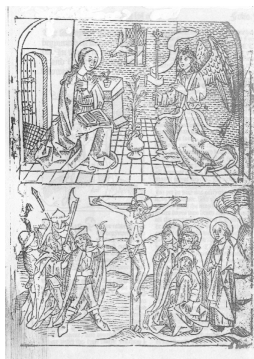


図 33-10-1 (stc.24876, 1498年) (Z10)



図 33-10-2 (stc.24876, 1498年) (Z10)

次の6種類について述べる前に、巻頭付近の白ページに示された図柄（木版）の役割を再度検証してみよう。標題紙と巻末の白ページに示されている図柄（木版）が「ページいっぱいの表示」機能をはたしていることは既に述べたとおりである。この機能は巻頭付近でも変わらないが、さらに別の点から確認してみよう。

図 33-1-2 の左ページの木版は Hodnett の *English Woodcuts*, 1480-1535 (no.374, fig.19) によると<sup>(40)</sup>、25 点の本に使用されている。その内、巻頭付近で用いられている 12 点を表示形ごとに示すと下記ようになる。

- Z1 : stc. 279 (Alcock. *Mons perfectionis*) (1497 年)、281 (Alcock. *Mons perfectionis*) (1501 年)  
 5573 (*The moost excellent treatise of the thre kynges of Koleyne*) (1499 年)、  
 17539 (*The myracles of oure blessyd lady*) (1496 年)、  
 21335 (*The rote or myrour of consolacyon & conforte*) (1499 年)  
 Z3 : stc. 787 (*Ars moriendo*) (1497 年)、17965 (*Mirk. Liber festivalis*) (1496 年)、17967 (*Mirk. Liber festivalis*) (1499 年)、20439.3 (*Propytees and medycynes for hors*) (1502 年)  
 Z5 : stc. 3261 (Bonaventura. *Speculum*) (1494 年)、  
 Z6 : stc. 1978 (Betson. *Ryght profytable treatyse*) (1500 年)、21334 (*The rote or myrour of conso la-cyon & conforte*) (1496 年)

この図柄（木版）はキャクストンが 1491 年に *Fifteen oes* (stc. 20195) で初めて使用し、ド・ウオードに引き継がれると、彼は 1493 年の stc. 24875 (*Voragine. Legenda aurea*) で初めて巻末に使用した。巻頭で使われた最初の例は 1494 年の stc. 3621 (Bonaventura. *Speculum*) であるが、後続版は出ていない。上記の 12 点からわかるように、彼はこの図柄（木版）をおおらかに使用し、特定本用の図柄（木版）として限定使用していない。逆に言えば使わなくてもよい図柄（木版）である。

表 33-1 : 1 図柄を巻頭の連続する 2 ページで使用している本

	1497	98	99	1500	2	7	10	13	15	16	19	24	25	26	28	32	34
stc	284	6931	5643	264	286	23164	12091	18934	20882	4601	17974	15579	18528	15399	10002	6035a	20882
				17022			20883			10628	25541					17975	

1 図柄を他の著作に使い回すだけでなく、表 33-1 に示したように、1 図柄を 1 図書（作品）で 2 回も連続して使用する例が見つかる<sup>(41)</sup>。Lydgate (J.) の「Here begynneth a lytyll treatyse of the horse, the sheep, & the goos」(Hodnett, no.1289) では、図 33-6 (stc. 17022) に示したように、1 図柄が巻頭の連続する 2 ページ（標題紙とその裏ページ）で使用されている。しかしこの図柄を連続して使用する理由はまったく見あたらない。それに書名で「馬、羊、ガチョウ」と言っておきながら、図柄にはそれらがどれも描かれていない。内容的にも不適切である。巻頭付近

の図柄（木版）も、内容の理解を助けるためと言うより、ページを埋める目的で使用していることは明らかである。

1 図柄を連続して使用する本は 22 点なので、ド・ウォードの出版総数から見れば決して多くない。しかしこれらは忘れた頃に出現する、と言うよりつい気を許して使ってしまったような表れ方である。白ページを埋めるのは面倒で気の重い作業だったのではないだろうか。

木版は巻末でも同じ使われ方をしている。例えば stc. 5759（1496 年）では巻頭（図 33-1）の絵 2 点が巻末（図 30-1）で重複使用されているばかりでなく、4 点の絵には書名も重複表示されている。あるいは図 30-4 のように巻末の 2 ページで連続して使用されている例（印刷者マーク）も見かける。1 図柄を 1 図書で 2 回も重複して使用する理由は何もない。ましてや書名を表示した標題紙的なページを 4 ページも用意する必要はない。図 30-12 ともなると、図 30-12-1 の右ページで使われた木版が、次のページ（図 30-12-2 の左ページ）でも使用されているばかりでなく、標題紙ページでも使用されている。巻末の木版も白ページ用の埋め草であることは明らかである。

### 34. 巻頭付近の白ページ

しかし巻頭付近の白ページがいつも標題紙や木版で埋められているとは限らない。第 32 項で白ページや余白のある表示形について保留にしてきた 6 種類について取り上げる。この 6 種類は白のままで埋められていないページがどの位置にあるかによって、次の 2 つに区分できる。

A. 白ページが中間に位置する場合— Z2（図 33-2）、Z4（図 33-4）、Z7（図 33-7）、  
Z10（図 33-10）

B. 白ページが巻頭に位置する場合— Z8（図 33-8）、Z9（図 33-9）

これらの表示形がそれぞれ何件使用されているかを見てみよう。

表 34-1：巻頭付近の表示形の使用件数

X1	Y1	Y2	Z1	Z2	Z3	Z4	Z5	Z6	Z7	Z8	Z9	Z10
39	243	41	60	91	13	6	1	7	2	8	1	1

表 34-1 によると、「A」の Z2（「標題紙＋白ページ」）は使用件数が 91 点なので、Y1（標題紙＋本文ページ）の 243 件に次いで大きい数である。Z2 は意識して使用されていると見てよい。しかし Z2 形（図 33-2）では 2 白ページのうち、最初の 1 白ページは標題紙ページであるが、残りの 1 白ページは白ページのままのため、「ページいっぱいの表示」とは相容れない表示形になっている。Z2 を公認表示形とするためにはその理由が求められる。

図 33-2（Z2）で言えば、巻頭の第 1 ページは標題紙ページなので「ページいっぱいの表示」を

している。そして本文ページも「ページいっぱいの表示」になっている。その間に白ページがあるので、本全体としては「ページいっぱいの表示」をしているとみなそうとしたのではないだろうか。このように考えれば、巻頭付近の白ページも巻末の白ページと同じ扱いができる。白ページのままで済ますという手抜き思想は巻頭にも存在したのである。とすれば、Z4（「incipit」標題紙＋白ページ）は6件、Z7（木版ページ＋白ページ）は2件、Z10（木版ページ＋文字ページ）は1件と、件数は少ないが、これらも「Z2」と同じ表示思想で処理できる。

### 35. 本全体の白ページ

それに対して、「B」のZ8（図33-8）は「白ページ＋白ページ」であるが、両白ページとも白のままで埋められていない。それらとは下記の8点である。

stc. 286（Z8, G2）（1496年）、287（Z8, G2）（1497年）

同一作品の別版だが、印刷年は同一で、白ページに変化はない。

stc. 670（Z8, G4）（1525年）、14546（Z8, C1）（1500年）、

いずれも後続版は出ていない。

stc. 22978（Z8, H3）（1523年）、22979（Z8, G2）（1526年）

両者は初版と後続版の関係だが、後続版の巻頭は2白ページのままである。

stc. 285（Z8, G2）（1497年）、21070（Z8, G4）（1500年）

後続版はそれぞれ stc. 285.5（Z1, G2）（1502年）、stc. 21071（Y1, C4）（1517年）で、標題紙ページ形に変わっている。

上記の8点は、後続版が出ても相変わらず白ページのままとか、後続版では白ページが標題紙に変わっていたり、あるいは後続版が出ていないものなど、2白ページがどのように変化するかははっきりしない。

しかしこの8点にも特徴は見つかる。巻頭では2ページそして巻末には1白ページが存在しているからである。例外は stc. 14546（巻頭では2白ページだが、巻末は活字ページで終わる）だけである。巻頭と巻末に白ページがあるということは、本文を真ん中にずらして配置したと解釈できる。白ページが多出するとき、多出を目立たせない最も簡便な方法は白ページを巻頭と巻末に分けて配置することであり、この配置がそれほど特異でないことはZ1、Z3、Z6を見ると分かる。これらの表示形はいずれも本文の始まる前の2ページが白ページであるが、白ページには標題紙や木版が示されている。Z1等とZ8との違いは白ページが埋められているかないかの違いにすぎない。

「B」のZ9（図33-9）（stc. 24880（1527年））（1点のみ）は「白ページ＋木版ページ」であるが、巻頭の1ページは白ページのままで埋められていない。後続版が出ていないので、この2ペ

ージがどう変化するかは不明である。本全体としては「Z9, G2」なので、巻頭では2白ページ、巻末では1白ページがあり、本文は真ん中に移動していることが分かる。

標題紙ページや木版ページがあるということは、白ページがそれだけ多出している証拠である。表28-1によれば、巻頭と巻末が同時に「0」（白ページ無し）となるのは「X1形+C形」の19点しかない<sup>(42)</sup>。それ以外の497件はいずれも巻頭か巻末、あるいはそのどちらにも白ページが存在していることになる。516点のド・ウォード本で、巻頭（表34-1）には667ページ、巻末（表28-4）には354ページもの白ページが生じる。1点あたり2ページ弱の出現数なので、本を印刷して全ページが自動的に埋まるのはかなり幸運に近いことがわかる。というより本を印刷すれば、必ず白ページができると見たほうがよい。

この時、白ページのままで済ますのであれば問題はないが、文字の表示されていないページとは読者から見れば無駄なページであるから、編集者の力量が問われる。そこでとりあえず見た目だけでもごまかすために考え出されたのが白ページの分散化であった。白ページが巻頭や巻末に分散して出現するのは、本文ページを真ん中に配置した結果とみてよい。

### 36. キャクストンの本作り

しかし白ページを分散配置しても白ページが埋まるわけではない。そこでド・ウォードは解決策の一つとして白ページに標題紙ページや木版を表示したのである。彼は白ページを埋めるという考え方をどこで知ったのであろうか。

キャクストンはイギリスの創始印刷者であるが、標題紙を積極的にも消極的にも採用していない。表36-1はキャクストンの出版物で、巻頭（「前」）と巻末（「後」）に出現する白ページの数を示している。彼の本は本文から始まることが予想されるが、表を見ると、パラグラフ・タイトル形であるにもかかわらず当初は「0」（「白ページ無し」）が少ない。本文は巻頭からすぐに始まっていないし、巻末も折丁の最終ページで終わっていない。本文が短いため、本文を真ん中に移動し、白ページを本の前後に分散させることで、白ページの集中化を避けようとした様子が伺える。

しかし巻末に白ページが発生しても、著者の助けが得られなければ、印刷者がそこを埋めなければならない。白ページが2ページぐらいであれば、あまり形は良くないが、木版や印刷者マークの連続使用も考えられる。しかし白ページがそれ以上になると、木版や印刷者マークだけでしのぐのにも限界があるため、印刷者でも文章で埋めることがあった。キャクストンはJ. Lydgateの*Horse, sheep, and goose* (stc. 17018, 1477年)や*Court of sapience* (stc. 17015, 1480年)の巻末を雑文で埋めている<sup>(43)</sup>。しかし追加文だけでは全ての白ページを埋めきれず、前者では1ページ、後者では4ページも白ページが残っている。

表 36-1：キャクストン本の巻頭、巻末の白ページの様子

1474	前	後	1475	前	後	1476	前	後	1477	前	後	1478	前	後	1479	前	後	1480	前	後	1481	前	後	1482	前	後
4920	2	3	15375	2	0	4851	2	0	3303	0	3	3199	2	0	5758	2	2	4852	2	1	5293	2	0	9992	2	1
						4920	2	3	4850	2	0	5091	?	?	6828	2	4	6828	2	4	13175	2	1	13438	2	3
						17030	0	0	4890	0	0	7273	0	0	24189	0	0	9991	2	1	20919	2	2			
						21458	1	1	5082	2	2				4853	2	3	13440a	1	3	24762	2	1			
									5090	0	1							14077c.110	?	?						
									6826	2	4							15848	?	?						
									15867	?	?							15868	?	?						
									15383	2	2							17015	2	4						
									17008	2	0							24865	2	1						
									17018	?	1															
									17019	2	1															
									17032	2	1															

1483	前	後	1484	前	後	1485	前	後	1486	前	後	1487	前	後	1488	前	後	1489	前	後	1490	前	後	1491	前	後
4853	2	3	175	2	4	801	2	1	5087	2	3	15394	0	1	14072	?	?	6829	1	3	789	0	1	786	0	0
4921	2	2	3259	?	?	5013	2	2				17720	0	0	21429	2	3	7269	0	2	1007	?	?	3305	0	0
5057	0	0	3326	2	3	19206	0	2				24874	2	0	24189			14077c.115	0	0	3124	2	?	15854	0	0
5083	2	1	15296	0	4	25853	2	1										14100	0	0	3260	2	2	17959	2	2
5087	2	3	17023	0	3													17722	0	0	12138	0	0	20195	2	0
5094	2	5	17024	?	?													20920	0	0	15871	?	?	9348	2	2
6473	2	4																21431	0	1	15872	?	?			
12142	2	2																			24763	0	2			
17957	2	0																			24796	0	3			
22588	2	0																								
24873	2	3																								

表 36-2：白ページの出現件数

白ページ	1474	1475	1476	1477	1478	1479	1480	1481	1482	1483	1484	1485	1486	1487	1488	1489	1490	1491
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
有り	1	1	1	3	2	7	8	1	3	3	6	6	4	3	2	10	8	2
無し			1	1	2	2	3	1	2	1	1			1	2	2	1	2

表 36-3：1487～1491年の白ページ

1487	前	後	1489	前	後	1490	前	後	1491	前	後
24874	1+1(woodcut)	0	6829	1(device)	3	3260	2	1+1(device)	17959	2	1+1(device)
			21431	0	1(device)	24763	0	1+1(device)	20195	1+1(woodcut)	0
						24796	0	1(device)+2			

巻頭と巻末の白ページの有無を件数表示した表 36-2 によると、1487 年頃から巻頭や巻末に「白ページ無し」が多くなる。「白ページ無し」はこれまでも見かけたが、この多発が偶然とおもえない変化が 1487 年頃から起こり始める。その内訳を示したのが表 36-3 である。

表 36-3 によると、巻頭や巻末の白ページに木版や印刷者マークが使われ出す。キャクストンの木版の使い方は、ド・ウォードの場合ほど明白ではないが、「0」（「白ページ無し」）の多発と併せて考えると、木版を使って白ページを埋め、巻末までページを使い切ろうとする努力が始まったことがうかがえる<sup>(44)</sup>。

そしてキャクストンの弟子であるド・ウォードは当初から「ページいっぱいの表示」を目指し、埋める手段として標題紙ページと木版を多用している。ド・ウォードはキャクストンの採用した「ページいっぱいの表示」という考え方を受け継いだと見てよい。

### 37. 他の印刷者の動向

キャクストンと同時代の印刷者で、イギリス初の標題紙採用者マクリニア (Machlinia) はその点でどんな動きをしたのであろうか。

表 37-1: マクリニア本の白ページ

		1481	前後	1482	前後	1483	前後	1484	前後	1485	前後	1486	前後	1488	前後	
書名	文字									4591	2 1					
P T				4594	0 ?	258	2 1	9347	2 1	4589	0 ?	9993	0 1	15853	0 0	Machlinia
						273	2 2	9737	2 1	4590	0 0	23906	? 1			
						15720	1 0	9755	2 1	9264	2 2	26012	2 2			
						20917	2 1			14103	0 2					
						23905	2 3									
不明						70145				15869		14096		15849		
						9176										
P T		9513	0 0	9742	0 1	9731	2 1									Lettou & Machlinia
				9749	0 2											
				13922	? 0											
				15719	1 0											

この表はマクリニア本の巻頭（表では「前」）と巻末（「後」）に出現する白ページの様子を示している。ここで使われている数字は白ページの数を示している。

表 37-1 を見ると、巻頭と巻末に白ページがない本 (0 + 0) は 2 件しかない。これ以外は必ず白ページが巻頭か巻末に見つかる。そして英国初の標題紙本 stc. 4591 (1485 年) では巻頭に 2 白ページ、巻末に 1 白ページが存在するが、巻頭ページに標題紙ページを配置することで、1 白ページの存在を消している。マクリニアも白ページの存在を意識し、白ページの分散を心掛けていたことが分かる。レトウ (Lettou) との共同出版でも、白ページを分散させる様子がうかがえる。当時の印刷者は白ページを意識して分散していたと見てよい。その中にキャクストンが含まれることは前述した通りである。

### 38. 奥付の表示原則

出現する白ページに対処するために、ド・ウォードはヨーロッパで使われ出した標題紙ページの導入に思い至った。彼にすればキャクストンの下で白ページの出現を経験しているので、標題紙ページの採用は白ページ削減という目的に合致した最適の工夫となる。しかも盛り込む情報は奥付から移してくるので、毎回、自作文を考えなくて済む。この点も魅力的なはずである。



**R**ycharde Kelle hermyte of Hampull in  
his contemplacions of the drede and loue of  
god With other dyuerse tytles as it the Werth  
in his table.

図 38-1-1 「三同」形の標題紙の書名の活字  
(stc.21259, 1506 年)

ghoolly enemies & suffre me not to lese y grace that  
is grauted me / but of your worthy offyce kepe me in  
goddess seruyce to my lyues ende. And after y passyn  
ge of the body presente my soule vnto the mercifull  
god. for though I fall aldaye by my owne feclite you  
I take in wytnes þeuer I hope in mercy. Gladly wol  
de I worshyp the & I myght to your lykynge therfore  
god to worshyp for you / you alio in hym after his ho  
ly techynge. I thanke hym wth this hoily prayer. **P**a  
ter noster. Et ne nos. Sed libera nos a malo. Amen.  
Deo gratias.  
**E**mpynted at London in fletestrete in þe sygne  
of the soune By Wynkyn de Worde. Anno dñi M  
CCCC.vi.

図 38-1-2 「三同」形の本文末と奥付の活字

**The myracles of our lady.**

図 38-2-1 「標・大」形 標題紙の書名の活字  
(stc.17541, 1530 年)

**W**han saynt Edmund archbishop of Can  
torbury lyued / of hym it is recyted that he ly  
ued deuoutely / & on a tyme he prayed to oure  
lady saynt Mary desyringe her þe he myght  
haue some perfyte knowlege by some reuelacyon how  
many woundes our blessed lord Jhesu suffred in his pas  
syon. And in his deuoute prayer a certayne voyce sayde  
to hym. Euery daye thurgh the yere saye fftyf tymes  
pater noster / and so many woundes Jhesu chryst hadde.  
  
**T**here is ended byuers myracles of oure blessed Lady.  
Imprynted in London in flete strete / at the sygne  
of þe soune by me Wynkyn de Worde. In the  
yere of oure lord. M. CCCC. & xxx.

図 38-2-2 「標・大」形 巻末の本文と奥付の活字

**Bucolica virgiliti cum  
comento familiari.**

図 38-3-1 「標 = 奥」形 標題紙の書名の活字  
(stc.24814, 1514 年)

**A**d iuuuenco huius Maroniani operis commendatio.  
**N**unc licet ipse Maro gracili moduleretur auena  
Et pecus et siluas / prataq; leta sonet.  
Et hic tamē altisona tandem resonante camena  
Troiam cum danaisq; arma virumq; canet.  
**S**ed quamq; arma strepant rabido comitata furoris  
Pius pecus / et silue / prataq; leta placent  
Et iugiter atq; ne sis inuenis / quim pectora teta  
Deion grates / qui tibi pressit agas.  
  
**P**ublii Maronis bucolica carmina vt  
cūq; exposita. Impressa per Wynanduz de  
Worde Londoniis cōmorātē in bico angli  
ce nūcupato ( the fletestrete ) in signo solis  
Anno dñi. M. cccc. xliij. Die vo. xxj. Mo.

図 38-3-2 「標 = 奥」形 本文末と奥付の活字

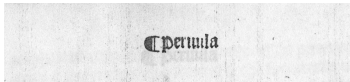


図 38-4-1 「奥・大」形 標題紙の書名の活字

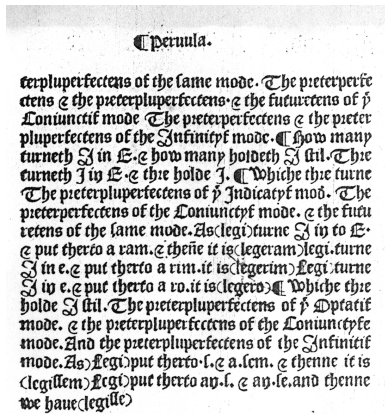


図 38-4-2 「奥・大」形 本文末の活字  
(stc.23163.6, 1496 年)



図 38-4-3 「奥・大」形 奥付の活字



図 38-5-1 「木版」形 標題紙の木版書名  
(stc.18566, 1509 年)

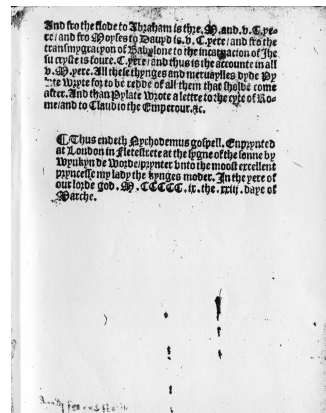


図 38-5-2 「木版」形 本文末と奥付の活字

表 38-1: 標題紙、巻末の本文、奥付の活字サイズの比較件数

	1492	93	94	95	96	97	98	99	1500	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
三同	1	2	2	2	11	1	1	5	9	2	4	3		4	3	3	3	7	9	3	6	3	5	7	1	6	1	5
標=大		1		2	4	7	6	7	5	2	3	1	3		9	4	10	14	8	8	3	6	7	5	7	18	14	15
標=大																		1	2			1	2	2	1			
奥=大					1																							
木版				3	1														2	2							1	

	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	合計
6	11	4	5	7	12	9	8	6	9	6	1		5	1			199
10	11	4	4	4	11	8	5	9	8	11	6	13	9	6	2		290
		1	1	2	1	1	1						1				17
																	1
																	9

「三同」：標題紙、巻末の本文、奥付の活字サイズが同じ（図 38-1）

「標・大」：標題紙の初行の活字が他の二者より大きい（図 38-2）

「標＝奥」：奥付と標題紙ページの活字サイズが同じで、本文活字より大きい（図 38-3）

「奥・大」：奥付の活字が他の二者より大きい（図 38-4）

「木版」：標題紙ページの書名が木版（図 38-5）

ところが一見魅力的に見える奥付情報の活用も大きな問題を内包していた。奥付とは本文の終わった後に、その本（の製作）に関する情報を提示する場所である。奥付は本文そのものではないし、著者の作成した文章ではない。従って本文とは違った形で表示しても良いように思える<sup>(45)</sup>。そこで「奥付」、「その直前の本文」さらには「標題紙」の3カ所で使われた活字の大きさを比べてみよう。その結果は表 38-1 に示した通りである。表によると、表示形は5種類になる。「標題紙、巻末の本文、奥付の活字サイズが同じ」（「三同」形、図 38-1）、「標題紙ページの最初の行の活字が他の二者より大きい」（「標・大」形、図 38-2）、「奥付と標題紙ページの活字サイズが同じで、本文活字より大きい」（「標＝奥」形、図 38-3）、「奥付の活字が他の二者より大きい」（「奥・大」形、図 38-4）、「標題紙ページの書名が木版」（「木版」形、図 38-5）である。しかし5種類と言っても、「三同」形と「標・大」形が全体の9割以上を占めていることから、この2種類が中心表示形ということになる。

しかもこの2表示形には共通点があった。図 38-1-2（「三同」形）と図 38-2-2（「標・大」形）から分かるように、両形の文末と奥付の活字が同じ大きさなのである。奥付は本文でなく、印刷者の工夫した文章にすぎない。それにもかかわらず本文より大きな活字を使えば、図 38-3-2 からわかるように、本文より目立ってしまう。小さな活字を使っても同じことがいえる。奥付を目立たないで追加表示するには奥付を文末と同じサイズの活字で示すこと、あるいは、本文の表示原則に従って表示することにつきる。奥付にはこうした表示制約が課されていたのである。

これと同じ状況は巻頭でも起こっていた。標題紙上の書名に続けて「印刷事項」を示す場合、「印刷事項」は書名と同じ大きさの活字で表示していたからである。おかげで「印刷事項」が書名中に埋没してしまったことは第 12 項で述べたとおりである。

### 39. 標題紙ページの表示原則

こうした奥付情報が移動して、標題紙に表示されることになる。しかし当初は奥付情報がすべて移されるわけではなかった。ド・ウォードの場合、多くは書名だけを移し、その他の情報は奥付に残っている。そして残った奥付情報は依然として本文の後に表示されている。となれば標題紙の表示原則が不明なこともあって、標題紙に移した情報を奥付（さらに遡れば本文）と同じ原

則で表示するのは当然である。表 38-1 をみると、1505 年までは「三同」形（標題紙，巻末の本文，奥付の使用活字が同じサイズ）のほうが、「標・大」形（標題紙の活字が最も大きい）より少し多く用いられている。奥付情報を標題紙ページに表示するときは本文の表示原則に従っていることが分かる。おかげで書名活字は小さく、行数が少ないために、標題紙を「ページいっぱいに表示」しようとして苦勞したことは再三述べるとおりである。

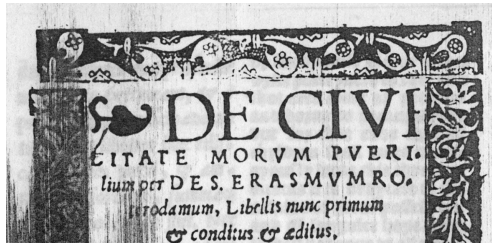


図 39-1-1 標題紙 (stc.10467.5, 1534 年)

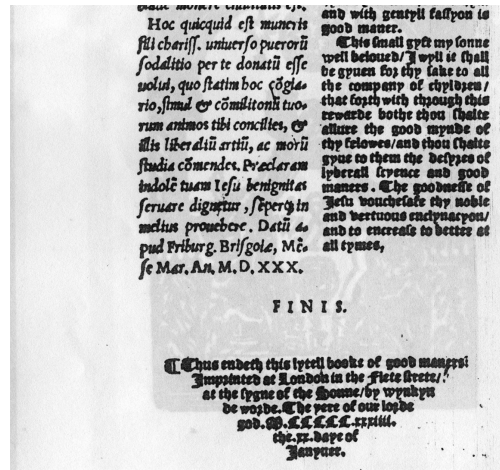


図 39-1-2 巻末と奥付

「標・大」形も当初から使われているが 1506 年からは使用数を増してくる。しかし図 38-2 からわかるように、書名が大きい活字で示されていると言っても本文活字の範囲内の大きさにすぎない。39-1-1 のような非常に大型の活字ではない。「標・大」形も本文の表示原則に従っていたと見てよい。

表 39-1：大型活字の使用件数

「大型」の数字は「標・大」形の内数である。

	1523	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
標・大	4	4	11	8	5	9	8	11	6	13	9	6	2
大型	1					1		1	5	13	7	6	2

それに標題紙ページとは本文ページを中心部分に移動したことによって生じた（白）ページにすぎないので、本文ページと同じ折丁内にある。となれば、標題紙を表示するときに、本文と同じ活字書体を使うだけでなく、本文ページと同じ大きさで示す（版面の大きさが同じ）ことは当時とすればごく自然なことである。彼が本作りで目指していたのは標題紙ページを含めた、折丁内の全てのページを本文ページの表示原則（「ページいっぱいの表示」）に従って示すことだったのである。

ド・ウォードは晩年に近い 1530 年頃から大型活字を使いだし、1531 年からはその表示形が主流となる。使用状況と図はそれぞれ表 39-1 と図 39-1-1（の標題紙）に示した通りである。大型活字を使っても、書名全体は図柄表示されているので、「ページいっぱいの表示」をめざしていることに変わりはない。大型活字は本文表示の範囲を越える大きさであるが、木版活字で既に大型の文字を経験しているの、使うのに抵抗感は無かったはずである。大型活字を使うことによって「ページいっぱいの表示」がより簡便になっただけでなく、それを図柄表示することによって標題紙上での文字表示を少なく出来る可能性が生まれた。標題紙表示が本文ページの原則を守りながら、それを越えようとする動きが出てきたのである。

#### 40. 巻頭の段標

標題紙ページは本文ページと同じ折丁内にあるので、本文ページの表示原則「ページいっぱいの表示」を心掛けていたと言った。もしそうであれば、本の最初のページは本文の最初のページではなくて、標題紙ページと言うことになる。

表 40-1：標題紙上の段標の有無

	1492	93	94	95	96	97	98	99	1500	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
有		1		1	5	1	2	7	4	1	4		1		8	3	9	14	9	6	7	5	11	6	7	23	14	18
他				3	3						1		1		1	2	3	9	6	5	1	3	3	7	1		2	2
なし		1	1	1	6	5	4	3	3	1	1	4	1	2	2		1								1			

20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	合計
10	18	9	8	9	17	14	9	11	16	13	7	11	12	7	2	340
2	2		1	3	2		1	4		3		2	2			73
2	2				3	1	2	1		1			1			50

有：段標付き書名  
 他：巻き軸、木版書名、頭文字、  
 大型活字の合計  
 無：特徴の無い書名表示

図 38-1-1 や図 38-4-1 などを見ると、書名の前に大文字の「D」を逆向きにしたようなゴシック体の段標（paragraph mark）が付いている。写本の時代には段落の始まりを示す記号として使用され、刊本にも同じ目的で採用された<sup>(46)</sup>。そして標題紙が発明されると、ここにも採用されたが、使用目的は同じだったのであろうか。

標題紙上の書名は「段標付きの形」、「巻き軸入り、木版書名、頭文字、大型活字のように、1 行目の書名表示に特徴を持たせた形」、「何の特徴も見られない形」に区分できる。その件数をそれぞれ「有」、「他」、「無」として出現件数を示すと表 40-1 になる。3 形はそれぞれ 340 件、73 件、50 件である。しかし「無」形は 1507 年から激減するし、1509 年から 1519 年までは「無」がほぼ 0 件である。そこで 1507 年以降の総件数を見ると 305 件、64 件、15 件と大きく変化する。書名表示は「有」か「他」のいずれかで示そうと見えてよい。基本的には段標を付け、1 行目を特徴のある書名表示にしようとしたのである。これは文章の始まりを目立たせる工夫で

あり、段標が持っている機能である。標題紙ページを本文ページとして扱えば、書名が文章の始まりとなるが、書名は文字数が少なく、活字も小さい。ページいっぱいに表示されていないため、文章が始まることに気づきにくい。そこで書名の前に段標を付けることで注意を喚起し、文章(段落)の始まりを示そうとしたのではないだろうか。段標は飾り (printer's mark) として使っていなかったのである。

段標には図 40-1 に示した 3 種類の形がある。(3) は形が斜めに傾いているので、イタリック体である。(1) は写本の時代から使用されている形で、ゴシック体である。それに対して (2) は活版印刷術を開始してから使われ始めている。ゴシック体本にも使用されているが、ローマン体の本での使用が多く、現在は段標と言え (2) の形である。そこで (1) がゴシック体そして (2) をローマン体と呼んで区別しても良いのではないだろうか。

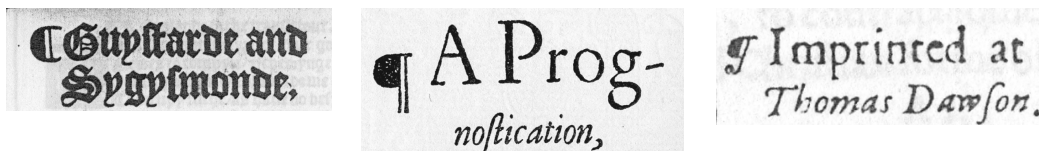


図 38-5-1：段標 (1) ゴシック体

(2) ローマン体 (?)

(3) イタリック体

1528 年になると彼はローマン体本に木蔦 (hedera) (図 39-1-1) を使い出す。木蔦は写本の時代に語間記号として使われたようであるが<sup>(47)</sup>、彼はそれを書名の前で使い、段標として機能させたのではないだろうか。

加えて、木蔦は文字で図柄表示をするときに重要な役割を果たしていた。図柄表示で逆三角形を示そうとする場合、最下部を文字で示すのが非常に難しいため、図 39-1-2 の奥付表示のように、大半は等脚台形の逆形で終わってしまう。そこで最下部に木蔦やクロス (+) のような記号類を配置し、逆三角形を完成させる工夫として使用されることがあった。

## 最後に

ド・ウォードは早々に標題紙を取り入れるが、これまで標題紙の示し方には疑問が投げかけられてきた。それもほとんどが否定的な判定である。しかしそうした意見の大半が現代の視点から見た一方的な判定であり、根本原因を究明した上での判定ではない。本稿では彼がなぜそうした標題紙表示をしたかを解明した。彼は標題紙を「ページいっぱいに表示」(Fill up page) する目的で、前述したような表示形にしたのである。無節操にごちゃごちゃと表示したわけではなかった。

しかもこの原則は標題紙表示というより、彼にとっては、本作り全体にかかわる表示原則であった。折丁の全ページを本文ページと同様に「ページいっぱいに表示」する、あるいは「折丁の

全てのページを使い切る」という考え方である。この考え方に立ってド・ウォード本を眺めると、これまで奇異としか捕らえられなかった疑問点が氷解する。標題紙をなぜごちゃごちゃと表示 (Crowded title-page) したのか、巻頭や巻末に木版や印刷者マークを多用あるいは重複使用したのはなぜか、などである。

ジョンソン (A. F. Johnson) は 1928 年に *One hundred titlepages, 1500-1800* を出版し、「序」で同種の疑問点を挙げながら、簡略な標題紙史を展開している<sup>(48)</sup>。もっとも彼はド・ウォード本に疑問を投げたのではなく、初期の印刷本に共通する疑問を投げかけたのである。またスミス (Margaret M. Smith) は「ラベル書名+木版」順の表示、木版を併用した「ページいっぱいの表示」という重要な指摘をするが、その理由は不明と言っている<sup>(49)</sup>。こうした疑問に対する答は再三述べてきたとおりである。本稿で提示した「ページいっぱいの表示」という本文ページの表示原則は初期の印刷本に共通する表示原則だったのであろうか。

#### 注

(40) Hodnett, E. *English woodcuts 1480-1535*. Oxford, At the University Press, 1973.

(41) 同じ木版が 2 回使用されている例は他にもある。

1. 図 31-8-1 の木版 (僧侶) stc. 284 (2 回)

2. 図 31-3-1 の木版 (骸骨と騎士) stc. 6931 (2 回)

(42) 「X1 形 + C 形」の 19 点の内訳

Stc. 12955 + (1495 年)、17032a (1495 年)、17005 (1498 年)、4689 (1507 年)、15398 (1507 年)、12953 (1509 年)、23155.9 (1509 年)、14522 (1510 年)、17806 (1510 年)、20034 (1510 年)、24240 (1510 年)、4840 (1513 年)、5162 (1520 年)、10450.2 (1520 年)、24241 (1520 年)、10082 (1526 年)、25520 (1526 年)、23908 (1529 年)

(43) Bühler, C. F. *The Fifteenth-century book: the scribes & the printers & decorators*. Philadelphia, Univ. of Pennsylvania Press, 1960. p.47.

(44) そして時には前後の白ページを削除して白ページをなくそうとしたと推定できる例が見つかる。stc. 1007 (1490 年) (*Four sons of Aymon*) の巻頭は「B 3 a」から始まり、それより前のページの様子は不明である。そして巻末の最終紙葉も不明である。余りに白ページが多いので、白ページを削除したのではないだろうか。

(45) ベネットは初期の英語本に見かける奥付表示について次のように言っている。

印刷者は巻末の小さな空きスペースをページいっぱいに組まないように心掛けたし、最後のページに余白ができて空けておき、そこに印刷者マークさらには奥付を印刷した (*English books & readers, 1475 to 1557*. 2nd ed. p.209.)。

これは表 28-1 の C 形や G 形に対する説明にはなるが、中間に白ページのできる P 形や Q 形を説明することにはならない。

(46) Parkes, M. B. *Pause and effect: an introduction to the history of punctuation in the West*. London, Scolar Press, 1992. p.305.

(47) *ibid.* p.304.

(48) Johnson, A. F. *One hundred titlepages, 1500-1800*. London, J. Lane and B. Head, 1928. pp. i-xv.

(49) Smith, Margaret M. *The title-page: its early development, 1460-1510*. London, British Library & Oak Knoll Press, 2000. p.89.